

令和2年度 新見高等学校(北校地) 具体的計画

学校 経 営 目 標	1 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 2 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 3 学校と家庭、学校と地域、校地間、学科間の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開										
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価			
						達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善方策	総 合 評 価
1		教務課	よりよい授業を目指す取り組み 指導教諭と連携した、教員相互で取り組める、授業力向上に向けた取組の推進	新学習指導要領のもとで必要とされる学力に対応できるよう、指導力の向上を目指す必要がある。このことについては、南校地に配置されている指導教諭と引き続き連携していきたい。	①公開授業の企画：年間25件以上。 ②公開授業の見学：年間75件以上。 ③指導教諭と連携した取り組みの実施。 A:3つの達成 B:2つの達成 C:Bに満たない	3つとも十分に出来ていない。 2～3学期にかけて実施していく。	C	①30件に終わった。達成できた。 ②67件に終わった。達成できなかった。 ③今年度は実施できていない	C	昨年度に比べれば前進したと考えている。参加する障壁をできるだけ取り除き、今までより高い同僚性のもとで授業改善に向かっていく雰囲気を作っていくきたい。	B
		生物生産科	生徒の変化に対応した、授業改善に学科全体で取り組む。 具体的には学科内での研究授業を行い、学科教員相互の授業力の向上を図る。特に実験・実習を効果的に取り入れた授業実践を主題とする。各教員が相互の授業を見学し、農場会議等の場で検討会を実施する。	多様な生徒が在籍しており、従来の座学中心の一斉授業だけでは、授業への意欲的な取り組みを維持することが難しくなっている。一方で、実験・実習へは意欲的に取り組む生徒が多い。	A:各教員が年間2回以上授業を公開し、検討会を行う。 B:各教員が年間1回以上授業を公開し、検討会を行う。 C:学期に1回相互に授業見学を行い、授業観察カードを交換する。	1学期の休校の影響で取り組みの期間が確保できていない。個別には相互の授業見学はできているが、学科全体でまとまった、意見交換は実施できていない。	C	授業の相互見学は、学期に1回以上実施できたが、授業観察カードの交換はできていない。計画的な授業公開や検討会は実施できなかった。	C	実験・実習を積極的に取り入れ、生徒の興味関心を高める工夫をした授業を増やすことができた。公開授業については、授業見学の時間確保が難しく、実施にいたらなかった。同一学科内で、公開授業や授業見学を実施することは時間割の制約が大きく、実施が困難であるが、学期1回以上の実施をめざしていきたい。	
		工業技術科	資格取得において、生徒に具体的な目標設定をさせ、合格に向けた取り組みをさせる。各担当者が計画的に補習を実施して合格率を向上させる。	昨年度のジュニアマイスター顕彰は特別表彰1人、ゴールド顕彰2人、シルバー顕彰8人であった。 職業技術顕彰は11人であった。 工業技術顕彰は3人であった。 ジュニアマイスター顕彰制度30ポイント以上の取得人数は11人であった。 取得率11.2%(11人/98人)	ジュニアマイスター顕彰制度のポイントが30ポイント以上(T科生徒合計90人) A:T科生徒の取得率が15%以上(14人) B:10%～15%(9人～13人) C:10%未満(8人以下)	ジュニアマイスター顕彰制度 ゴールド 1人 シルバー 2人 (9月12日現在)	C	ジュニアマイスター顕彰制度 ゴールド 1人 シルバー 7人 ブロンズ 8人 職業教育技術顕彰 8人 工業教育技術顕彰 7人 1月22日 現在	A	ジュニアマイスター顕彰は、資格ごとに設けられたポイントの合計数で表彰される制度であり、コロナウイルス感染症拡大に伴い、多くの資格検定が中止されたため判断ができない。例年多くの生徒が合格となった検定が中止となった。しかし、ゴールド表彰やシルバー表彰の基準は例年と変わらなかったため、本来ならば多くの表彰者が出ているはずであるが、左記の結果となった。来年度も多くの資格検定が中止になることも考えられるが、出来るだけ多くの資格検定を受験させるよう指導する。	
		総合ビジネス科	資格取得を通じて知識・技能の確実な習得を目指すとともに、思考力・判断力の育成を目指す。	検定試験上位級の合格が難しくなっている。3年次生は3種目1級合格者が1名、2年次生は、主要2資格の取得率が3割程度であり、複数の2級合格者は4名のみである。1年次生も苦戦が予想される。	a.1年次生：全商検定3級1種目以上取得90%以上 b.2年次生：全商検定2級2種目以上取得80%以上 c.3年次生：全商検定1級3種目以上取得20%以上 a～c項目で A:全項目達成 B:1～2項目達成 C:全項目達成できなかった。	9月末現在、3年次生で3種目合格者は2名、2種目合格者1名である。各年次とも目標に届いていないが、1・2年次生は後半の検定試験が続くため、合格率向上に努めたい。	C	2月7日現在、a)1年生情報処理3級の合格率が100% c)3年生3種目1級合格者6名となった。2月21日今年度最後の検定で合格者が少しでも多くなるよう取り組ませる。	B	上位級の合格が難しくなっている。下位級に確実に合格できるよう、丁寧な指導を心がける。	
		1年次団	具体的計画：基礎学力の向上をはかる。 取組：基礎学力テスト各自50点以上を目指して学習に取り組ませる。49点以下の場合や欠席者(公文含む)には課題を与える。各クラス年間平均点上位5名を表彰する。	学力が低い生徒が多い。また、学力差があり、基礎学力が定着していない。	1年次生の基礎学力テストの年間平均点において A:60点以上 B:50点以上60点未満 C:50点未満	学力的に低い生徒も多数いるが、1学期中に行なわれた基礎学力テスト3回について、学年の平均は全ての回で70点を超えている(国語:83.7点、数学:78.9点、社会:73.5点)。 個別には49点以下の生徒が各回5名程度おり、欠席者と合わせて課題を課した。進路実現のために、基礎学力が定着していない生徒の学習意欲向上を図るよう、各クラス、年次集会での声かけを続けて行なう。	A	学力的に低い生徒も多数いるが、2学期末までに行なわれた基礎学力テスト(トリアル・確認あわせて)13回について、A科59点、T科68点、B科72点で、年次団の平均は66点である。 確認テストが49点以下の生徒については、欠席者と合わせて課題を課し、全て提出された。	A	進路実現のためには基礎学力が欠かせないことを各クラスや年次集会で指導してきた。基礎学力が定着していない生徒も多いが、課題はすべて提出し、努力する姿勢を持っている年次団である。今後も基礎学力をつけることの重要性を指導していくことが重要であるとする。	
		2年次団	希望する進路実現に向けて、基礎学力をつけさせるため、クラス別で目標とする平均点を設定する。課題提出を徹底させ、学期ごとに順位を発表し、年度末に成績上位者の表彰を行う。	学力差が大きく、基礎学力の定着が難しい生徒が多い。また、クラスによっても大きな差がある。	基礎学力テストの平均点 A:A科50点以上、T科70点以上、B科70点以上 B:A科40点以上、T科65点以上、B科65点以上 C:A科40点未満、T科65点未満、B科65点未満	取り組みが弱い生徒も多々見られるが、現在までの基礎学力テストの平均は、A科が50点、T科が82点、B科が84点であった。各担任が、基礎学力課題の取り組みに力を入れている結果が出ていると考えられる。昨年のように失速しないように、今後も指導していく。また、成績の振るわない生徒の底上げをはかっていく。	A	基礎学力テストの平均は、A科が45点、T科が72点、B科が71点であった。2年次生全体では、昨年度より10点以上上回り65点であった。	B	修学旅行が中止になったこともあり、各クラスでHRなどを活用して取り組んでいたため、この成績で落ち着いた。来年は進路決定もあるので、進路を意識させながら取り組ませていくようにしたい。	
	基礎学力向上対策委員会	今一度、学校全体で学習する意義と目的を丁寧に指導する。 テキストの提出を徹底させる。 またSHRの前後に学習の時間を確保する。	昨年度1年間の基礎学力確認テストの平均点は53点であった。 昨年度2回行った実力テストの平均点は61点であった。 2学期以降、学習に対する意欲が低下している。	1年間の基礎学力確認テストと実力テストの平均点 A:確認75点以上、実力65点以上 B:確認70点以上、実力60点以上 C:確認70点未満、実力60点未満	トリアルテストが実施出来なかったが、1学期中3回の確認テストの平均点は76点であった。年次団と教科を中心とした働きかけが奏功していると考えられる。実力テストは集計中だが、学力がきちんと定着するよう指導を継続したい。	A	2学期からはトリアルテストも実施している。 2学期までの8回の確認テストの平均点は67.6点であった。 8月と12月に実施した実力テストの平均点は56.8点であった。	C	例年に比べると進路決定後も3年次生の学習意欲は維持できていると思われる。また2年次生の学習意欲の高まりが感じられる。しかし、範囲を定めない実力テストでの結果は不十分である。次年度は積み上げられた学力がきちんと定着するような指導法を検討する必要がある。		

令和2年度 新見高等学校(北校地) 具体的計画

学校 経営 目標	1 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 2 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 3 学校と家庭、学校と地域、校地間、学科間の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開																				
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価													
						達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善方策	総 合 評 価										
2	生徒課		北校地の文化祭において内容の充実を図り、地域に根付いた盛り上がり継続を目指す。そのため内容の充実を図る。	天候などにもよるが、300～500人が参加している現状である。昨年は例年より来場者が少なかった。平成30年度は557名、昨年度は408名の来場者であった。	来場者数を一つの指標として、考えたい。 A: 500人以上 B: 400人以上 C: 400人未満	現在計画中であるが、入場制限を行う予定であるので現在のところ目標の検証がむずかしい状況となっている。	—	本年については一般入場者は制限し来場をお断りしたので状況は厳しかった。	C	生徒にとっては開催できたことで少しばかりの達成感を感じられたかもしれないが、できる中で工夫ができたとは言いがたい。この状況下が来年も続いているかもしれないので中で生徒が主体的に活動しているプログラムとしていきたい。											
	進路指導課		校内外のガイダンスや企業の方を招いた進路学習会等で地域の力を活用し、進路意識を高めて早期に進路目標を設定させ、3年次生全員が満足度の高い進路決定をめざす。	新型コロナウイルスの影響で景気が落ち込むと予測される。そのため求人状況も落ち込むと思われる。ここ数年で基礎学力が低下しており内定を阻む恐れがある。進学についても同様である。1・2年次生に対しても、進路を考えるきっかけとなる場面を多く設ける必要がある。	3年次生の進路決定者に占める「進路決定に満足」の割合(アンケート調査実施) A: 90%以上 B: 70%以上 C: 70%未満	新型コロナウイルスの影響で採用試験が10月16日以降となったため、現在は書類発送の準備段階である。進学はAO入試で数名合格している。	B	就職者の1次不合格者は、6名であった。現在は1名を除いて内定をいただいている。残り1名は結果待ちである。ほぼ内定はいただけると思う。また、本年度は公務員が4名内定をした。(2名は自衛隊、1名が新見消防、1名が津山市職員) 進学は、2名が1次希望が不合格となったが、1名の通信大学希望者を除き合格をもらっている。通信大学希望者も書類を送り合格がもらえらると思う。アンケート調査は97.6%が満足であった。	B	本年度の生徒は、就職試験が1ヶ月遅れたこともあり、面接練習はよくできていて、面接で不合格になることはなかった。ただ、学力不足と適性試験で不合格になっている。今後は学力の向上と自分の力にあった企業選びができるかだと考える。また、進路指導課とすれば、常駐3人体制で各1人で担当科を担う体制が良いと思う。											
	1年次団		具体的計画: 社会人として地域に貢献できる人材となるためにふさわしい基本的な生活習慣を身につけさせる。 取組: 企業が求める人材の条件として、遅刻や欠席が少ないことをあげて、指導する。特に寝坊したという理由での遅刻が連続する場合には、早急に保護者への協力を呼びかける。皆勤生徒を表彰する。	高校生活に慣れていない。また、基本的な生活習慣が身につけていない生徒がいる。	1年次の皆勤率 A: 4割以上 B: 3割以上4割未満 C: 3割未満	1学期(7/17まで)の皆勤率は、生物生産科7割以上、工業技術科6割以上、総合ビジネス科5割であり、1年次全体で6割以上となっている。長期欠席等もない。今後も、社会人としてのふさわしい基本的な生活習慣を身につけることの重要性について指導を継続する。	A	2学期(12/25まで)の皆勤率は、生物生産科22%、工業技術科25%、総合ビジネス科25%であり、1年次全体で24%で2割程度となっている。長期欠席はないが、欠席・欠課・遅刻・早退とも増加し、1学期の状態を継続することができなかった。	C	1学期は新型コロナウイルス感染症による休校等があり、実際の授業日が少なかったため皆勤率が高かったものと考えられる。2学期は2割程度の皆勤率ではあったが、社会人としてのふさわしい基本的な生活習慣を身につけることの重要性について、今後も指導を継続していくことが重要と考える。											
	2年次団		社会人として自立していくために、基本的な生活習慣を身につける一環として、朝の遅刻をしないように指導する。あわせて、授業に遅れないなど時間を守らせるとともに、普段から服装や身だしなみに気を付けさせる。	時間にルーズな生徒が見られ、朝の遅刻も1年次は多かった。	年次団の年間朝遅刻回数 A: 50回未満 B: 50回以上 C: 80回以上	欠席が目立つ生徒はあまりのいなかったが、授業遅刻や授業の欠課が目立つ生徒がいた。朝の遅刻も50近くに達し、目標達成が困難になった。普段の学校生活の過ごし方について、引き続き指導していく。遅刻が続く生徒には、保護者と連携しながら指導する。	B	朝遅刻は70回を越えてしまった。長期欠席者はほとんどいなかった。続けて休んだ生徒がいたが、今は改善されている。	B	基本的に学校に休まず登校する習慣は定着し、昨年から比べて朝の遅刻が改善された生徒もいたが、数名繰り返す生徒もみられた。声かけをしてきたが、来年度はさらに個別の指導を強める。社会人になるにあたって、生活習慣の大切さを訴えていく。											
	3年次団		【計画】 進路指導課と協力して早期に進路希望先を決定させ、第1志望100%の進路実現を目指す。 【取組】(新型コロナウイルスの関係で実施できない場合もある) ・応募前職場見学等3社以上行かせる。 ・オープンキャンパスへの積極的参加を促す。 ・出願書類は受け付け開始1週間前には完成させ、面接等の準備を充実させる。	昨年度末では約半数しか具体的な進路先が決まっていない。しかし、進路閲覧室等に行く回数が増加傾向にあり進路意識は高まり始めている。	第1志望決定率 A: 100% B: 90%以上 C: 90%未満	就職試験が開始されていないため検証できないが、専門学校について合格者が出ている。	—	第1志望決定率 <就職> 42/47 89.3% <進学> 32/34 94.2% (1名未決定) <計> 74/81 91.4% (1名未決定)	B	第1志望合否者の比較。 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <thead> <tr> <th></th> <th>合格者</th> <th>不合格者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>評定</td> <td>4</td> <td>3.3</td> </tr> <tr> <td>基礎学力</td> <td>54.5</td> <td>31.3</td> </tr> <tr> <td>欠席</td> <td>3.7</td> <td>1.2</td> </tr> </tbody> </table> このことより評定4.0、基礎学力テスト55点、欠席5日以内を目標にすれば良いのではと考える。		合格者	不合格者	評定	4	3.3	基礎学力	54.5	31.3	欠席	3.7
	合格者	不合格者																			
評定	4	3.3																			
基礎学力	54.5	31.3																			
欠席	3.7	1.2																			
新高パワーアップ事業推進委員会		専門科では生徒の視野を広げるために県外での販売実習を行う。今年度計画している取組に出来るだけ多くの生徒を参加させ、指導が行き渡るようにする。普通科では、学校連携コーディネーターと連携・協働しながら、主催者教育を中心とした総合的な探究の時間の取組を通して、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を育成する。	昨年度の学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において対象者の肯定的評価は両校地で72%であった。10月の県外での販売実習と11月の魅力化フォーラムの発表はいずれも成功裏に終わり、好評を得た。核となる生徒は成長している。他の生徒へも指導が行き届くように工夫が必要である。	年度末の学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において、 A: 肯定的評価が80%超 B: 肯定的評価が70%超 C: 肯定的評価が70%以下	様々な制約がかかり、計画通りの活動は行っていない。県外での販売実習は新見市内で可能な活動に代替する。1月に予定していた発表会は研究紀要の作成で代替する。学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において肯定的評価は75.4%であった。	—	制約がかかる中、新たに中学校への出前授業や校内での販売実習を行うなど、最大限の活動が行えている。研究紀要の作成も順調に進んでいる。学校自己評価アンケートの地域連携に関する項目において肯定的評価は75.4%であった。	B	地域との交流活動に対して様々な制約があったにも関わらず、アンケートの肯定的評価は昨年度よりも高まった。各部署での指導と核となる生徒の働きかけが奏功したと考えられる。パワーアップ事業は本年度で終了するが、地域との交流活動は本校の教育活動の要である。来年度以降も与えられた環境の中で最大限の取り組みをしたい。												

令和2年度 新見高等学校(北校地) 具体的計画

学校 経営 目標	1 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 2 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 3 学校と家庭、学校と地域、校地間、学科間の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開										
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価			
						達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善策	総 合 評 価
3	教務課	内規の改定にむけて校地解消に向けたワーキンググループの進捗を受け、作業を進める。前年度までに進めてきた作業(関係部署への情報収集の依頼)を継続して行い、R3年度末完成へ向けて情報収集を継続する。	南北校地となり16年が経過し、統合当時に決定された内規と現状がずれ、不整合が散見される。また、校地解消へ向けた今年度の大きな課題は、週時程の決定とそれに基づいた新課程の青写真をつくることである。内規をも含めた他のワーキンググループが動き始めた。慎重に情報収集を進めることが望まれる。	ワーキンググループの進捗に合わせ、 ①改訂計画が完成する。(決裁を得る) ②計画に基づいたアクションを起こす。 ③計画に基づいた改定案が関係各所でほぼ出来上がる。 A:①②③ B:①② C:①	校地解消へ向けた準備は進んでいるが、内規の検討まで具体的には進んでいない。	C	次年度を「すり合わせの年」として有効に活用するべく、今年度中に各分掌が内規を含めたさまざまな内容に関する話し合いをスタートすることになっている。	B	施設設備、教育課程など入れ物はできているが、中身を詰めていく作業が肝心になる。校長の出される「グランドデザイン」を丁寧に解釈することですべての教職員が共通認識を持ち、来年度赴任する教職員にも伝えていくことで、新しい新見高校を作っていく意思を全員が持って不断の活動にあたりたい。	A	
		新教育課程の完成 昨年度末、校地解消に向けたワーキンググループで新教育課程の試作を完成させた。ワーキンググループでの指示を受け、7月を目標に完成に向けた作業を進める。	新教育課程の大枠は完成したが、選択科目の厳選が目下の課題である。生徒と教師が高い意欲をもって自己実現を叶える礎となるよう慎重に編纂している。	①完成 A:①	それぞれの学科についての原案は完成し、学校設定科目の開設計画書が出来た段階で果との事前協議に入る。完成に向けて順調に進んでいると考えている。	A	各教科の協力により、完成することができた。	A	目の前の生徒だけでなく、未来の生徒のためにも、本校がどのような高等学校であるべきか考え、高い意識で取り組みたい。		
		業務縮減への取り組み 課内業務の効率化を図る。	ここ数年、効率化への取り組みを行ってきたところだが、今年度は目標化し、超過勤務時間の縮減につなげたい。	①3つ以上の効率化 ②2つの効率化 ③1つ以下 A:① B:② C:③	教務課会議を昨年度よりも頻回にすること、学校日誌の担当者を本館の教務課で行っていること、職員会議の資料出しのタイミングなど改善できた。今後も効率的な業務の遂行を目指す。	A	①教務課会議を昨年度よりも頻回にした。 ②学校日誌の担当者を本館に席がある教務課で担当した。 ③職員会議の資料提出を早めた。 ④教務課「目安箱」を設置し、気になった改善点の糸口をすぐに記録できるようにした。	A	これまでの先生方が支えてきたところに若い力、新しい力も取り込んで、教務課としては非常に活力のある1年を過ごせた。次年度も入れ替わりは予想されるが、多くの先生方の意見を統合しながら、よりよい課の運営を目指したい。		
生物生産科	小学校・認定こども園、地域の諸団体、JA、農業普及指導センター、市役所などと連携した教育活動の推進。具体的には、交流活動や販売実習、就農準備講座への参加、地域と連携した特産品開発などを行う。	連携活動について、地域から多くの依頼がある。また、長期に渡って継続している活動が多い。一方で継続的な行事としてこなしているだけで、生徒の学習活動としての成果は十分に評価できていない。	各活動の実施後にアンケートを行い、その肯定的評価の割合で評価する。 A:80%以上 B:70%以上 C:70%未満	1学期休校、諸活動の自粛により、交流活動を実施できない時期が続いた。2学期から、イネ刈り交流やイモ掘り交流をコロナ対策を施しながら再開している。生徒の評価は今後実施の予定。	-	中心的に活動を行った2、3年次生を対象に5つの項目で事後アンケートを実施した。アンケートの肯定的評価の平均は、3年次生78%、2年次生71%となった。	B	事後のアンケート調査から、「意欲的に取り組んだ」「充実感あった」という項目で肯定的評価の割合が高く、主体的に取り組む活動に充実感を得ていることがうかがえた。一方、「地域に役立っている」、「将来も活動に参加したい」の項目は評価が低く、活動が地域への貢献につながっていることへの、理解を高める必要があると思われる。			

令和2年度 新見高等学校(北校地) 具体的計画

学校 経 営 目 標	1 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力等を育む効果的な教科指導の工夫 2 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 3 学校と地域、学校と地域、校地間、学科間の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開				中 間 評 価		最 終 評 価				
	番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価	結果の分析及び改善方策	総合 評価
4	教務課	生徒募集にかかわる広報活動指標に示した①～③の取り組みを中心とする。	令和2年度入学者は定員の70%にわずかに届かない水準にとどまった。広報活動のみが生徒募集の切り札とは限らないが、一手立てとする必要がある。	①学校案内のマイナーチェンジ ②高校説明会の工夫 ③その他の工夫とイノベーション A:①②③ B:①② C:①	①実施できた。 ②スライドを改善した。 ③ホームページの改定が進んでいる(地域連携広報室)	A	①実施できた。 ②スライドを改善した。 ③ホームページの改定が完了した。	A	地域連携広報室との連携をどのようにとるかという点に課題があった。ここ数年の教務課の広報活動の要点を校内へ広報する必要を感じた。	A	
		学校内外への広報の充実 年度当初、保護者に対し具体的な目標の評価の着眼点を告知するが、アンケート依頼時に成果の掲載を一覧視できるものを保護者に提供する。以上は主幹教諭(地域連携担当)と協働する。	令和元年度の学校自己評価アンケートで「内部広報の充実」といった主旨の質問に対する回答結果は、平成30年度のそれよりも微増していた。しかし、今後も継続した工夫が必要である。	学校自己評価アンケートでの学校経営目標4に対する、A(よくあてはまる)、B(あてはまる)を併せた保護者及び生徒双方の肯定的な評価が、 A:60%以上 B:55%以上 C:55%未満 ※昨年度より5%ずつ目標値を上げた。	具体的な取り組みは今後行っていく。	7. 各学科の教育活動やその成果、部活動の実績などの情報を積極的に発信する →生徒81.2% 保護者79.2% 8. 地域のニーズを把握し、地域が求める情報を発信する →生徒68.5% 保護者64.7%	A	おおむね良好と考える。 次年度も継続して取り組む。			
	生徒課	部活動等の活動実績などの情報収集を円滑に行い、旬な情報を校門入り口プレートで来校者へ発信する。またHPで必要な情報を共有したい。	校門入り口付近プレートは昨年度途中から南校地と共通で掲示が開始されている。校地別に顧問が分かれ、情報が集約しにくい現状があるが、素早い掲示により生徒のやる気や自尊心の向上を目指す。	大会が行われた2週間以内には、情報収集と作成を行う。 特に、中国大会や全国大会に出場する際は開催されるまでに余裕をもって作成・行動する。 A:開催される2週間前までに作成できた。 B:開催までに作成できた。 C:作成できた。	年度初めから夏までの間は中国大会以上の大会が中止となっている状況である。今後大会の状況、活動の実績を見守ってきたい。	—	秋以降、中国大会以上への参加している部活動については昨年と同様の部活動だけとなり、新規プレート作成の問題もなく時間的目標は達成できている。	B	本年度は中国大会あるいはその予選会となる大会が中止となっていた状況で、掲示する部活動プレートの数も少なくなった。今年行われる予定時期が過ぎた段階で撤去したが、昨年のままにしておいた方が良かったのではと感じた。		
	厚生課	厚生課では、「生徒(教職員も含めて)が、安全・安心な学校生活を送るために、業務活動を行うことを目標とする。上記の目標の達成のために、厚生課の各係や、保健・図書・環境整備委員会が、諸活動を実施し、その内容を内外に伝えることを取り組みとする。具体的には、行事や活動を実施した後、生徒や保護者への便りを出したり、学校のホームページやブログに掲載する。	昨年度は、保健委員会は、保健便りを毎月1回の8回発行。図書委員会は、図書便りを3回発行。整備委員会は、便り発行は0回であった。その他の便りは発行しなかった。「便り」を作成して、印刷・発行することになった。生徒の委員会活動や学校行事などの活動写真をウェブページにアップ(4回)することはできていた。	各係や各委員会活動の「便り」と学校ウェブへの発信回数の合計を、 A:各学期に4回合計12回出す。 B:各学期に3回合計9回出す。 C:上記を下回る。	保健便りを月一回出している。 整備・図書委員会については今後出す予定。	A	保健便り 10回 図書便り 2回 整備便り 0回 ブログアップ 1回 合計 13回	A	保健委員会や図書委員会の活動は、今年度とても活発にできた。 今後は、環境整備委員会も活動を活発にしていきたい。 ブログへのアップを習熟して次年度は素早いタイミングで上げていきたい。	A	
	生物生産科	学科の学習成果や諸活動を地域に発信する取り組みを行う。これまで学校のブログやメディアの報道を通して、PRしてきた。今年度は実感として生徒の取り組みを知っていただくため、学校祭で学科紹介のパネル展示、体験講座、ふれあい動物園(現在のものを充実)を実施する。生徒と地域の方が直接触れあう機会を設けることで、本校生徒の良さや学科の取り組みを具体的に知っていただく機会としたい。	生徒の取り組みがメディアで取り上げられることは多いが、地域の方に取り組みが実感として伝わっていないと感じられる。	見学者・参加者の方にアンケートを実施し、その肯定的評価の割合で評価する。 A:70%以上 B:60%以上 C:60%未満	文化祭が非公開となったことで、計画が実施できなくなった。 学科の活動を紹介するパネルの製作を今年度の目標に変更する。	未	文化祭が非公開となったため、当初の計画は実施できなかった。 計画を変更し、学科紹介のパネルを製作した。 新たな取り組みとして、哲多中学校で「動物飼育」をテーマとした、出前授業を実施した。	B	当初の計画は実施できなかったが、来年度の実施に向けて準備を進めていきたい。今年度製作した学科紹介パネルは、校外での販売実習などで活用したい。 今年度から始めた中学校での出前講座は、次年度以降も内容を充実させ、継続していきたい。		
工業技術科	科の学習の成果や取り組みを、新聞やテレビなどの報道を通して魅力ある情報発信を行う。課題研究や実習等を中心にして、校外での貢献活動や各種競技会やコンテストに積極的に参加をする。	ブログを通して科の教育活動を情報発信する。また、新聞やテレビなどのマスメディアに情報発信してもらえよう。昨年度の新聞、ケーブルテレビの報道回数は11回だった。	工業技術科の学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 A:15回以上 B:10回以上 C:10回未満 昨年度は、11回の報道回数であった。	工業技術科の学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 5回 「備北民報」タブレットスタンド2回 測量体験1回 「iチャンネル」タブレットスタンド1回 測量体験1回	C	工業技術科の学習の成果や取り組みを新聞やテレビで報道される回数 16回 「備北民報」タブレットスタンド2回、測量体験1回、出前授業4回「山陽新聞」出前授業1回 「iチャンネル」タブレットスタンド1回、測量体験1回、出前授業3回 「岡山県教育庁高校教育課フェイスブック」測量体験1回、ものづくり(測量部門)岡山県代替大会1回、ものづくりコンテスト(溶接)岡山県大会1回	A	コロナウイルスにより、各種競技大会が中止になった。タブレットスタンド、ドリームチャレンジ2020「小学生の夢作文(優秀賞受賞)」の小学生「測量体験」、新見南小学校と刑部小学校の出前授業、哲多中学校と哲多中学校への出前授業が報道各社に取り上げられた。ドリームチャレンジ2020「小学生の夢作文(優秀賞受賞)」の小学生「測量体験」と岡山県ものづくりコンテスト(測量部門)代替大会「優勝」においては、岡山県教育委員会のHPに掲載されている。また、中学校への出前授業は初めてであり、中学生の様子分かり、また入試にも好影響が出れば良いと考える。今後も、生徒の取り組みや結果をブログを通して情報発信に努めていく。			